
僕にも愛を下さいと.

とび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕にも愛を下さいと .

【Nコード】

N6023T

【作者名】

とび

【あらすじ】

GC楽曲歌詞に関してのとある陳腐なファンが書いた妄想。歌詞小説の分類。美しい表現なんて使えない、それでもやっぱり好きなので自己顕示欲丸出しかんじ。

風の音だけをきいて

別に疲れたわけじゃない、と僕は思った。それでもテーブルの上に残されていた書き置き文字はとも疲れているようにみえた。何に疲れたんだろう。いつつも勝手に旅行してくせに。能天気だ。野良猫はあまり好きじゃない。ごろごろしている飼い猫のほうが、よっぽど好きだ。髪をくしゃりとかき上げる姿が好きだったのを思い出す。結局どうとも言えず僕らは似たような気分を共有していた。家の鍵を閉めない無防備さとか、そういったところは好きだけだと嫌いだ。彼女はよく周囲に流される。影響され染まるのが好きなのかもしれない。それなら、僕に溺れて、染まってくればよかった。それなのになぜかよりによって彼女は僕に執着なんてしない。悔しい思いよりかは戸惑いを僕は常に抱いていた。

*

「好きなんやろ？ そういうの。あたしは、そういうのには拘りたくはない」

「別に、好きとかじゃなくて」

「そうなんやったらさ、態度で示してよ。なんも感じられへんねん」

愛がないというのか。砂に沈み込む足元を眺めながら、彼女は哀しそうに肩を落とした。泣きそうなのはわかっている。でも、泣かないのもわかっている。彼女は僕にとって強かな人で、彼女も何よりもそれを知っているから僕の前で涙を見せることはしなかった。どうせ、家で泣いているんだろう。そのぐらいは予想できるのに。意地っ張りなのか、そもそも気にしてさえないのか。波の音はや

けにざあざあとつるさく聞こえる。短めの彼女の黒髪を、やさしく風が吹かした。

*

彼女は唐突にこの世を去った。真夜中の事故だった。舌足らずなような、それでいて大人っぽいおかしな声が延々と耳にこだます。彼女は僕を恨んでいるのだろうか。不満？ 自己嫌悪？ 痛み？ どうでもいい。彼女はこの世にはもういない。それが偶然なのか自らの意思だったのかは僕にはわからないが、彼女が死んでしまった以上、事実を変えることは誰にだってできない。彼女に自殺するほどの理由があるとは、僕には思えなかった。それでも彼女は何かでひどく悩んでいたのかもしれないし、それともやっぱりただの不慮の事故だったのかもしれない。知る必要なんてない。彼女はそれを望まないから。

騒音が嫌いなのに、常に人波のなかにいることを望む。人込みは嫌いなのに人間が好き。彼女はよくわからなかった。最後まで、風の音と人の喋り声が好きだった。最後まで、とは言うが彼女はもしかすればまだどこかで生きているかもしれない。あの亡骸は、もしかしたら別人かもしれない。この世の可能性や確立なんて無限だ。僕が知ることのできる彼女に関しての事実は、ごく僅かなのだからそれでもやはり彼女はその辺を漂っているのだろう。彼女はひとつの場所には留まれない。時速限界スピードを超えたバイクは海岸線を抜けて山道へ突っ走ってゆく。真夜中の道はがらんとした星空をよく映えさせる。ああ、彼女もこう思っていた。肌に触れる冷たい風は彼女の感触を思い出させた。今日、僕はここを卒業する。

風の音だけをきいて（後書き）

風の音だけをきいて。より。前述どおり妄想過多。つーかすべてが妄想。短めですがなんとなく出してみました。次はもうちょっとマシなもん書きます。とりあえずテストかな

今 枯れゆく秋桜に

「曲を作るときって。なんだかね、気分が明るくなるでも暗くなるでもなくって、なんだかこう……。『無』になるっていうのかな。ぼわーんって気分がするの」

あたしがそんなことを言ってみせると、彼女は小さく声を立てて笑った。10年間、少しずつ変わりながらも、美貌だけは衰えそうにない顔。この人もあたしと同じような気分を味わうことはあるのだろうか、と思った。この人は、芸術家気質の天才めいた人で。あたしとはまた違うような人種なんだなと感じる。中世にでも生まれれば良かったのにね、と嫌味でもなんでもなく言ってみた。彼女はふつと首を傾げる。

「んー。やだ」

「やだって……」

「だってー。今生まれてなかったら、私、こんなんできひんかったし」

ほれ。と彼女は荒い筆跡のノートを差し出して見せた。あ、歌詞今書いてたんだ。気づかずにはべらべらと話し続けていた自分が恥ずかしい。それをごまかすように、少し強引に彼女からノートを奪った。ふわりと長い指が宙に舞う。そして眠そうに目のふちを擦りながら、柔らかなため息を吐く彼女。あたしにはない優雅な香り。これだけ優雅だからこれだけ自由なものが書けるのかな、とも思ったりもする。

さっそくノートの文章に目を落とした。ああ、やっぱり。ぴったり。最近は少しイメージが合わないかも、なんていう曲も少しはあった。だけれど、これはあたしの考えていたものとピッタリ収まっ

た。ホツと心の中で溜息をつき、作ったばかりのメロディを改めて脳内に取り出してみた。

「るるるー、とそれを適当に口ずさんでみたら、彼女がまた笑う。まったく、よく笑う人だ。そういうあたしだつてきつと、少しにやけた仏頂面をしている。」

「ねえ」

「んー？」

「これから、お茶しませんか。話したいこととか色々あるし」

「うん、いいけど…。もう大丈夫なん？」

開きつばなしの譜面と、キーボードを指差す。どうやら練習のことを彼女は言いたいらしい。今度はあたしがふふと鼻で笑った。練習しなくちゃならないのはお互い様だ。ライブだつて近いんだし、呑気にメンバー揃つてお茶なんてしている場合じゃない。だけれども、最近はやたらとタイトなスケジュールが続いている。もちろんこのような職業のあたしたちにとって忙しいのはこの上なく幸せなことなのだけれど、一息つく時間さえないのは厳しい。たまには、あたしだつてだらけたいんだ。それは彼女も同じことを考えていたのか、首を縦に振るとすぐに立ち上がった。

＊＊

はじめて顔を合わせたときは、なんて変わった人なんだろうと思つた。

お見合い形式で事務所によって集められたあたしたち4人。あたしと、残りの2人はまじめながら個性のある普通の音楽クリエイター

「だったと思う。普通に音楽がやりたくて、一生懸命努力して、事務所に入った。そしてとうとう夢にまで見たグループ結成に至った。そんな似たようなストーリーの持ち主。だけど、この人だけは、はっきりいって変な人だと思った。もちろん彼女が努力していないわけじゃない。頭が良さそうな分、きつと人の倍以上の苦悩を抱えてきたんだろうと直感で感じた。だからこそあふれるオーラ、凄み。ああ、これが作家、プロなんだ、とあたしは妙な感銘を受けたのを覚えている。」

「イルミネーション？ あー、木がかわいそうなやつか」

クリスマスの日、彼女がそう言ったのを覚えている。そのときのあたしはまだ彼女のことをほとんど何も知らなくて、その言葉に仰天した。え、なに、クリスマスのイルミネーションなのに木がかわいそう？ いやいや綺麗じゃん綺麗だからいいじゃん。なんで木の気持ちが出てくんの、童話じゃあるまいし……。

だけれど彼女は不満げに、いかに電気によって木が痛めつけられるかを語り、いかにそれを眺めて喜ぶ人間は残酷であるかを熱弁した。あたしは始終びっくりしながらそつとその話を聞いていた。大人しそうで寡黙な彼女が、ここまで多くをあたしに語るのははじめてだった。

人見知りっぽい目をしていた彼女があたしと仲良くしてくれるようになったのはそのときからだった。親友として買物なんかをして、仕事の日には同僚として真剣に音楽をやる。そんな隙間にちらりちらりと見える彼女の人間性は、あたしが思っていたよりはるかに大きなものだった。天才。言ってしまうえば簡単だけど、いつしかこの言葉があたしにとって彼女を形容するものとなっていた。彼女が心を本当に許すのはこの彼女の特殊な部分を受け容れた人間だけ

で、彼女の思想、すなわち才能を疑うものは決して彼女の素晴らしさを知ることにはない。それがまた、あたしを大きな穴に陥れた。なんとなく思い違いをしていた。永遠に、彼女の才能は私たちだけのものであると。そして彼女の才能が彼女個人の持物でなく私たち4人の共同のものなのだ。それが嘘になる日はなかった。彼女が何を考えているのかはよくわからないけれども、驚くぐらい彼女は自分自身に関してオープンだった。多くは語らないかわりに、尋ねられれば大抵はどんな質問でも答える。その数々の答えにやる気の温度差は多々見られたものの、彼女は生きてゆくことだけに關しては生真面目で真剣だった。

結局彼女は、自己を見せる力が大きかったのかもしれない。どんな人間でもそうであるように、自己顯示欲というものの持ち主でもあった。控えめだけれども、決して卑屈にはならない。必要以上に自身を持ち上げることもし卑下することもしない。それが彼女の姿そのものだった、とあたしは思う。

* *

「あの、考えたんだけど」

「ん。なに？」

「あたし、音楽続けてみようと思うんです。ほら、もう10年もやってきたけど……。数年前までは、10年で終わりにしようねってみんなで言ってた。でも、まだ、続けたい。あたしは音楽を永遠に続けようと思うんです」

「永遠に？」

「そう。あたしには、音楽のない人生は考えられないから」

苦い香り。あたしの苦手な香り。あたしの大事な大事な人生宣言は彼女にとつてそう目を見開くほどのことでもないのだ。無理もない。ため息を吐きかけた瞬間に、大きなコーヒーカーップに顔半分をうずめていた彼女が、ぱつと顔を上げた。そして一旦、目を伏せてから呟いた。

「私には、無理かもしれない」

どくん。と心臓が大きく音を立てる。

だけれども、と彼女は続けた。

「望まれたなら、永遠になんでも書き続けるよ。なにを書き上げてしまふかは、保障できないけど。これから先、10年だって20年だって、あなたが望むなら私にはできるよ。私の命は音楽じゃないけど、私の命は音楽以外でもないからね」

よくわかんないけど、大事でそうでもなくて大事な音楽？ わからない。何年も連れ添ってきた親友。心も通っていたと思う作曲家作曲家の関係。彼女は、もうあたしの音楽に飽きていた？ いや、そうじゃない。この人は天才。天才だからこそ、乗り越えなきゃいけない思考の苦悩があるのかもしれない。

「やっぱり、音楽続けるんじゃないですか」

「あー、うん。誰かが求めてくれる限りは、続けるよ。だけどね」

どうしようもないくらい優しい声で、彼女は言った。

「いつかは絶対に来る、私のものが受け容れられなくなる日は。必

要とされないこと、が一番恐れることでしょうか？ それはきつといつかは現実になるから。それまでに、穏やかに好きだけやっていけたらいい。私には、音楽の永遠は、見えへんかなあ」

「…またそんなこと言って。歌詞にすればいいじゃないですかー」

照れ隠しにわざと膨れた表情を作るあたしに、彼女はまたけらけらと笑う。この笑い声がこの先一生止まらなければいいのに、なんて無茶なことを思った。この笑い声がある限り、なんとなくあたしたちの音楽は存在しているような気がした。なぜか咲いた秋桜は、10度目の秋を迎えたけれど、未だに光を放っている。摘まわずにそっとしておこう。いつかの春、きっと秋桜は綺麗に綺麗に枯れてゆくと思うのだ。

その日までを、大切にしたい。

今 枯れゆく秋桜に（後書き）

たぶんガネ好きなら知ってると思います、タイトル。
登場するのはどっかの姫様と美人ポエマーですこれもまあふつう
にわかります。

リアルにあつたらどんな曲になってたんだろうなあ。
と考えた結果がこれ。

きつとたぶんこんな曲です。

誰がつくったのか知らないけどわりと好きかも。

歌詞小説ではないですが類似関連ということ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6023t/>

僕にも愛を下さいと。

2011年10月8日19時29分発行